

白岡市文化財保存活用地域計画 ～地域の文化財を地域の手で守るために～ 《概要版》



「白岡遺産」制度と「市民会議」の創設

これまでの指定文化財制度を補完する仕組みとして、身の回りにある後世に伝えたい文化財を、一定のルールに従って提案できる仕組みを作ることで、文化財の保存活用への市民参加を実現します。これにより「地域の文化財を地域の手で守る」仕組み作りとその気風の醸成を促します。

「白岡遺産」を提案しようとする市民は、保存団体を組織し具体的な「事業計画」とともに申請します。市観光協会や商工会等と連携し情報発信や文化財を上手に活かしたまちづくり、地域おこしに資する事業提案を行います。

行政側では、提案を行おうとする市民に対する申請事務等の支援や保存に関する必要な助言を行うとともに、文化財所有者(管理者)との連絡調整や、地域計画に掲載された関連文化財群等との関係、指定文化財との関係などについて多角的に検討し文化財施策に反映させるなど、行政として必要な支援策の検討を担います。

「白岡遺産」の仕組みは、関連文化財群が増えることはもちろんですが、関連文化財群を守ろうとする人たちが組織を増やしていくことで、市民と協働での文化財保護を根付かせるための仕組みです。将来、市民の皆さんが何かしらの「白岡遺産」の保護に関わっています、という社会になれば、そのとき、白岡市は、真に「地域の文化財を地域の手で守るまち」になれるということができるでしょう。

白岡市文化財保存活用地域計画の概要

- 計画の目的**
行政や文化財の所有者だけでなく、市民や地域など多様な主体が連携して、指定、未指定にかかわらず総合的に文化財を把握し、周辺環境を含めた一体として守り活かしていくための基本計画と行動計画として策定しました。
- この計画で扱う「文化財」の範囲**
文化財保護法で定める類型や指定か未指定かにかかわらず、市民が守り伝えたいと考えるモノ・コト・トコロなどすべてを広く扱います。例：伝説、祭り、方言、職人技、風景、遊び、自然環境、食文化など
- 白岡の歴史文化を象徴するキーワード**
自然・地理的環境、社会的環境、歴史的背景、把握した文化財、人々の生活文化などの視点で分析し、5つの歴史文化の特徴を導き出しました（2ページ参照）。5つの特徴に共通するテーマを「水とともにあった人々の暮らし」と表現することとします。
- 目指す将来像**
郷土の文化財に親しみ、理解し、皆の力で守り伝える活気あふれる歴史文化都市
- スローガン**
地域の文化財を地域の手で守る

白岡市の歴史文化の特徴
水とともにあった人々の暮らし

○二つの鎌倉街道と中世寺社群 →ストーリー1・2

市域東部と、中央部に鎌倉街道の伝承を持つ2筋の古道があり、沿線に中世由来の寺社が連なる。これらの寺社群に残された未指定の文化財や様々な伝承などは、地域の歴史文化を支えている。

○新田開発を巡る用排水路の開削と川の立体交差 →ストーリー3

河川の後背湿地や沼地の多い土地柄のため、古来排水に苦勞してきた。争論も多く、この解消のために多数の用排水路が掘られ、水路同士の立体交差など独自の歴史文化が形成された。

○排水の苦勞を乗り越えてきた低地の暮らし →ストーリー4

特産の梨栽培や掘上田、水塚などが示す生活文化は、水のもたらす災いを乗り越えてきた人々の暮らしや歴史文化の大きな特徴である。

○新井白石の残した歴史文化 →ストーリー5

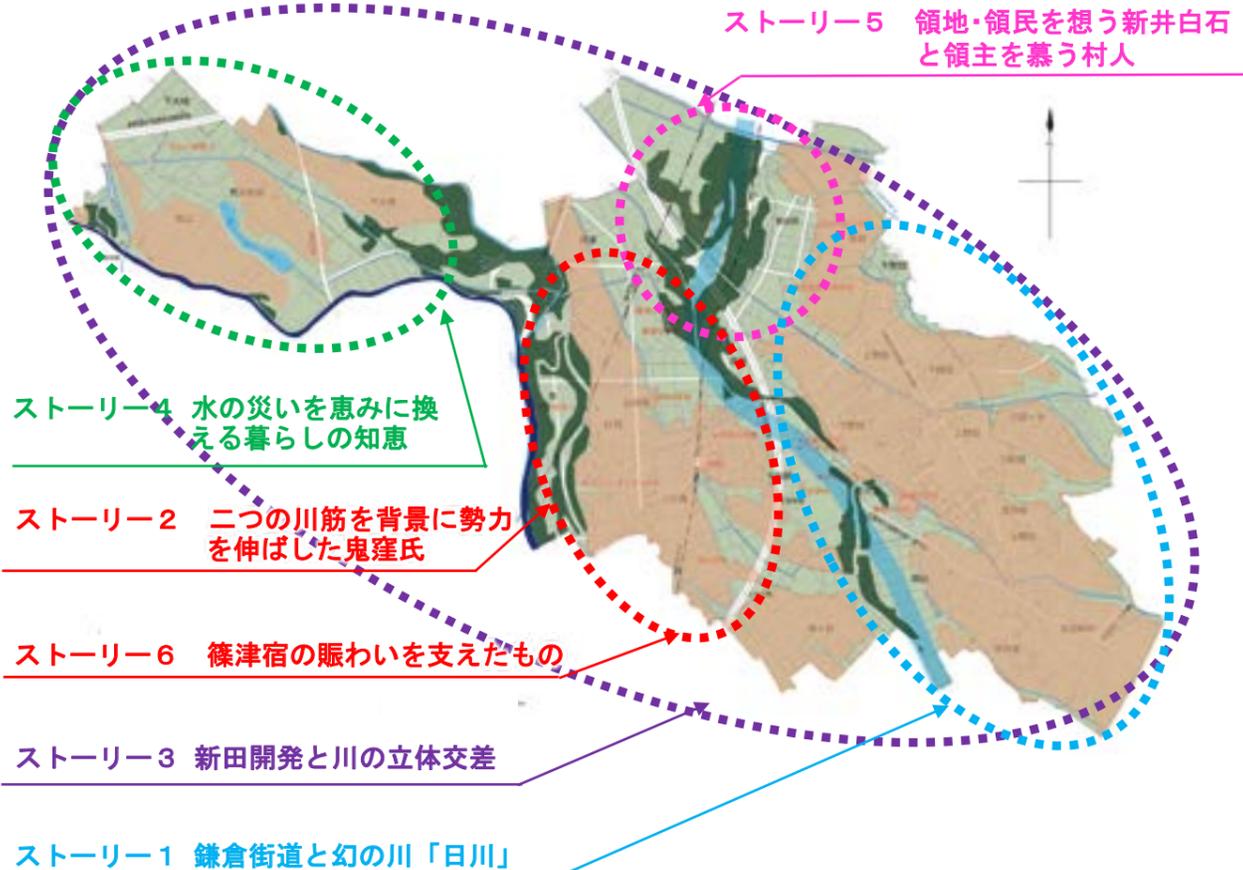
市域北部の野牛地区には、領主であった新井白石ゆかりの文化財が多数残されている。新田開発や救荒対策など民生に尽くした白石の功績は、市域全体の歴史文化に大きく影響している。

○篠津天王様の祭礼に見る近世町場の面影 →ストーリー6

中世初頭に土着した鬼窪氏が開いた篠津は、近世には近郷の流通、経済的中心として栄え市域の歴史文化を育む揺籃の役割を果たした。

6つのストーリー

ストーリー5 領地・領民を想う新井白石と領主を慕う村人



ストーリー4 水の災いを恵みに換える暮らしの知恵

ストーリー2 二つの川筋を背景に勢力を伸ばした鬼窪氏

ストーリー6 篠津宿の賑わいを支えたもの

ストーリー3 新田開発と川の立体交差

ストーリー1 鎌倉街道と幻の川「日川」

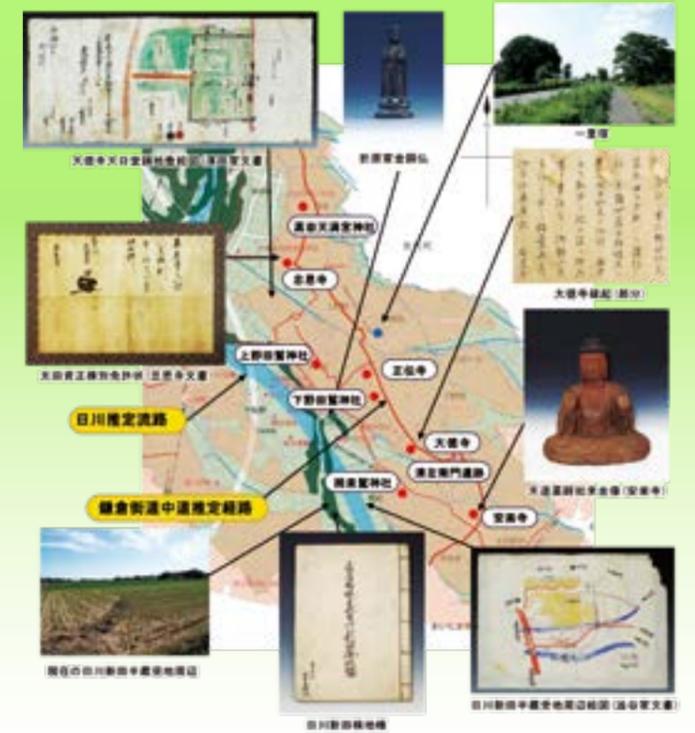
1 鎌倉街道と幻の川「日川」

市域東部に位置する大宮台地の慈恩寺支台を縦貫するように「鎌倉街道中道」に比定される道筋が残されています。沿線には、安楽寺、大徳寺、正伝寺、忠恩寺、上野田鷲神社、高岩天満神社など、中世起源の寺社が並び、様々な伝承が残されています。この道筋をもとに近世には、日光御成道が整備され、江戸から11番目の一里塚が置かれました。

自然環境とのかかわりでは、台地の西側を中世期には利根川本流筋であった「日川」が流れ、西側の崎西郡と東側の太田荘とを隔てていました。

日川は、村々のつながりや信仰圏などにも大きな影響を及ぼしてきました。村々は、鎌倉街道でつながる岩槻や春日部との関係が強い傾向にあり、鎮守も日川西岸が久伊豆神社を祀っているのに対し、東岸では鷲神社を祀っています。近代になると「日勝村」を構成するエリアの中核となります。江戸幕府の利根川東遷事業の結果、水流は途絶え、すでに川はありませんが、今でも地域では親しみを込めて「日川筋」、「日川田んぼ」などと呼んでいます。

慈恩寺支台を開析し日川に開口する支谷の一つ「大日沼の谷」は、大徳寺の大日如来の御頭と御手を沈めておいたとの伝承を持ちます。この谷は、時代を遡ると、縄文時代から人々の暮らしの痕跡が残され、湧き水を使った木の実の処理などが行われていたことがわかっています。



2 二つの川筋を背景に勢力を伸ばした鬼窪氏

利根川筋と荒川筋の最接近点で、両水系の水運の便がよく、鉄生産の拠点でもあった篠津に目をつけ、古代末から中世初頭に野与党鬼窪氏が土着します。鬼窪氏は篠津を拠点に白岡支台全域を勢力下に治め、血縁のある氏族は周辺に拡大していきます。

現在の篠津観音堂から篠津小学校前を通り寺塚へ抜ける道は「のよみち」と呼ばれています。人々の生活の中にいまも野与党が生きている証拠です。康治元年(1142)の草創と伝えられる篠津久伊豆神社のすぐ南側には、複雑に堀の巡る館跡が存在し、鬼窪氏との関係が想像されます。

篠津から白岡、小久喜、実ヶ谷にかけては「鬼窪郷」と呼ばれ、中世起源の寺社や館跡が展開します。これらの多くは、鬼窪氏ゆかりのものと思われ、特に、入耕地館跡は、「高麗経澄軍忠状」で観応の擾乱に際して「鬼窪にて旗揚げ」と見える挙兵地点と推定されます。

白岡支台西縁部に館跡が集中するのは、台地西側が急峻となる大宮台地の特徴に加え、現在の元荒川、星川や河川後背湿地が天然の要害となったためだと想像されます。

寿楽院の前から西に延びる古道は鎌倉街道と呼ばれています。篠津の台地を縦貫する道を合わせて元荒川沿いを南下し伊奈へ抜けます。この道は「鎌倉街道羽根倉道」と呼ばれる道筋へ通じます。観応の擾乱の折、挙兵した鬼窪氏らは、この道を進軍したのでしょう。

篠津から、白岡・小久喜・実ヶ谷と連なる大宮台地の白岡支台は、荒川水系と利根川水系とを隔てる要衝に位置し、鬼窪氏の勢力拡大の基盤となりました。14世紀後半、鬼窪氏が鎌倉府の中で関東管領上杉家と密接な関係を持ち重要な立場を占めることができたのも、安定した勢力基盤があったからに他ならないでしょう。



*ストーリー3~6は、ホームページ掲載の本編第6章をご参照ください。